

[論文]

メディアが映す日本統治下の樺太観光

——「オタスの杜」先住民観光をめぐる言説を中心に——

井出 晃憲

はじめに

日本列島は、地理的にユーラシア大陸東部沿岸に位置する弧状列島であり、島国ゆえに古来より大陸から影響を受けつつも自律的な歴史を歩んできた。本来、列島の呼称と国家の名称は別個でもよいはずだが、両者はしばしば混用されてきた。8世紀初頭に「日本」なる国号が定まった頃、南西は奄美諸島、北東は宮城辺りとされたこの国の境は時代が下るごとに拡大される。「黒船」の衝撃の下、近代国家の設立に乗り出した日本は、国の版図を19世紀後半に列島の北次いで南の両端まで拡大した。その膨張の延長線上に植民地として獲得した台湾と樺太⁽¹⁾という島嶼がある。

弧状列島上に展開された日本の帝国へと向かう初期の膨張と統合のプロセスを考察する手がかりとして、本稿では北方境界に位置する樺太の観光動態について検討する。とりわけ北緯50度線に近い敷香近郊^{しすか}にあった少数先住民が暮らす「オタスの杜」での観光に着目したい。

『樺太日日新聞』記者であった庄司宏によれば、樺太庁が「オタスの杜」に保護を与えたのは1927(昭和2)年1月である。当地には、以前から少数先住民が暮らしていたが、1926(大正15)年1月に露領からヤクート族の商人ヴィノクローフ⁽²⁾がソ連による迫害に追われ亡命しかの地に入ると、翌年、土人部落に指定され、定住のための木造家屋が建てられたことを契機に、他の少数先住民らも敷香支庁土人係指導の下、これに倣った。三十戸近い家屋群ができたことで、ここに一つの集落が形成された。オタスの語源はアイヌ語で、砂の多い処という意味である。オタスの位置は、敷香市街から幌内川を隔てて1kmあまりの地点で、幌内川と敷香川との中島からなり、面積は27万坪(約70ヘクタール)で、一半はツンドラ地帯、他の一半は砂丘であった⁽³⁾。

(1) 正式には北緯50度線以南の南樺太である。本文でも当時の一般的な呼称に従って樺太とする。

(2) ヴィノクローフについては以下を参照。N・ヴィシネフスキー著、小山内道子訳『トナカイ王：北方先住民のサハリン史』成文社、2006年。本稿ではヴィノクローフで統一しているが、庄司はウイノクローフと表記している。

(3) ここでは庄司宏編『民族最後の人々：オタスの土人』樺太印刷、1937年を参照した。なお「オタスの杜」の成

ちなみに樺太の少数先住民について付言しておけば、本稿で扱うのはオロッコ(ウイльта)、ギリヤーク(ニヴフ)、キーリン(エヴェンキ)、サンダー(ウリチ)、ヤクートの5民族⁽⁴⁾に限定している。彼らは樺太戸籍に登録されて「樺太土人」とされ、内地人と区別されるという共通点を有していたのがその理由である。他方で樺太アイヌは、1933(昭和8)年1月から戸籍法上は内地人として登録されており、また「オタスの杜」の住人でもなかったため、本稿では言及しない⁽⁵⁾。

序論：問題意識と先行研究

1.1 問題意識

ところで、境界領域の少数先住民に焦点を当てるのはなぜか。端緒は、当時の市井の国民が帝国初期の日本の輪郭をどのようにとらえていたのか、つまりその境界を認識する表象は何であったのかという疑問に始まる。本稿ではその答えを探るべく、人口に膾炙するかたちで読み物として出版される新聞・雑誌の記事や文学紀行、調査記録、これを通じて流布する境界地域に関わる言説、さらには仕事や観光を通じた境界地域への旅行動向などを素材として検証する。

1990年代以降に隆盛したポストコロニアル批判で、エドワード・サイードらの「オリエンタリズム」は人文社会科学の言説が持つ政治性を告発した⁽⁶⁾。かねてより植民地主義との関係が批判されてきた人類学でも、ポストモダン人類学が、人類学の根幹たる民族誌を書くという営為のもつ政治性を疑問視し、その真正性を問うた⁽⁷⁾。テキスト解釈が時代性や政治性を考慮せねばならないとすれば、紀行文や観光対象の真正性もまた疑わなければならない。

坂野徹は、人類学に対する植民地主義からの批判を踏まえた上で、人類学と近代国民国家との関係も問わねばならないとする⁽⁸⁾。ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』が明らかにしたように、出版ジャーナリズムをはじめ諸学問、諸制度は国民統合の機能を

立年代は1926(昭和元)年であるという(田中了、D. ゲンダーヌ『ゲンダーヌ：ある北方少数民族のドラマ』徳間書店、1978年、28頁)。これは田村将人「一九二〇年代のサハリン先住民族の移動と国境の関係性：樺太庁による『オタスの杜』集住化」原暉之、兎内勇津流、竹野学、池田裕子編著『日本帝国の膨張と縮小：シベリア出兵とサハリン・樺太』北海道大学出版会、2023年、305-335頁も参照。

(4) 民族呼称については当時一般的であった他称を冒頭に、現在一般的である自称をカッコ内に記した。ただし記事や作品の中には錯誤も見られるがそのままとした。

(5) アジア歴史資料研究センター(Ref. A03021872900)によれば「御署名原本・昭和七年・勅令第三七三号・樺太施行法律特例中改正」は1932(昭和7)年12月13日改正、昭和8年1月1日施行。なお樺太先住民の法的地位については加藤絢子『帝国法制秩序と樺太先住民：植民地法における「日本国民」の定義』九州大学出版会、2022年が詳しい。

(6) エドワード・W. サイード著、今沢紀子訳『オリエンタリズム』(上・下)平凡社ライブラリー、平凡社、1993年を参照。

(7) 中生勝美『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』風響社、2016年、16-21頁。

(8) 坂野徹『帝国日本と人類学者 一八八四—一九五二年』勁草書房、2005年、2-4頁。

有する。人類学的言説もまた国民としての集団的同一性を創出する一種の物語にほかならない。人間の自己同一性は他者の存在を前提としており、国民統合の物語は、自己(「われわれ」とは異質の他者(「かれら」)をめぐる語りを要請する。人類学は「われわれ」と「かれら」の織り成す物語であり、「かれら」について語れば「われわれ」の輪郭を描き出し、「われわれ」について語れば「かれら」の姿を見出す相互補完構造を持つ。

ところで帝国の外縁部で新たに版図に組み入れられた他者の扱いについて、中生勝美は「異化」と「同化」の概念を用いて整理する⁽⁹⁾。「異化」とは帝国拡張のために外に向かって作用するもので、他者について性急な統合は必要としない。民俗学的に言えば、「旧慣調査」などの民族誌の作成など包括的な知識でこれをカバーしようとした。他方、「同化」は内に向かって統合を促進するもので、支配の確立に際し阻害要因となりうる他者を不安要素として調査する。「帝国が異文化を併呑する構造として、『異化』と『同化』の相反した力学が、帝国の異民族統治政策として作用してきた」と中生は述べる。

本稿で取り上げる「オタスの杜」の住人達は、樺太の北緯50度線近くという帝国の輪郭の縁に暮らしつつ、帝国のより中心部から来訪する者達の認識によって、「われわれ」と「かれら」のどちらかの側に置かれ、研究者からは「異化」と「同化」の狭間で記述されてきた、アンビヴァレントな存在であったといえよう。

冒頭の疑問に戻れば、読み物で事前に知識を仕入れた旅人が、鉄道や船で長距離をく移動して帝国の版図を体感しつつ、目的地で異民族である他者と現実に対面したとき、自己と他者をく比較して何を感じるかという問いとなる。観念としての他者がここで具体的なものとなる。この経験は旅人にとって帝国の輪郭を身体化する一つの契機であったに相違ない。

阿部純一郎は、このような「調査」や「観光」⁽¹⁰⁾さらには「博覧会」を統治技術という観点から捉え、それら諸事象に共通する、人々がく移動するという点と物事をく比較して視るという点が、膨張する植民地帝国を支えてきたのだと述べる⁽¹¹⁾。阿部がく移動やく比較を重視する背景には、ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論のうち、人の移動とナショナリズムとの連関について論じた「巡礼圏」の概念がある⁽¹²⁾。人のく移動くを通じてナショナルな共同性が想像されるメカニズムにおいて、ある共通の地平の下で差

(9) 中生『近代日本の人類学史』、513頁。ここでの「異化」とは「非同化」という意味で、「同化」の反対語として使用されている。

(10) ただし阿部純一郎の研究における先住民観光とは、先住民が帝国の先進地域を観光して巡ることであり統治政策に活かすことを目的としていた。

(11) 阿部純一郎『く移動く比較の日本帝国史：統治技術としての観光・博覧会・フィールドワーク』新曜社、2014年、11-30頁。

(12) ベネディクト・アンダーソン著、白石さや、白石隆訳『増補 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』NTT出版、1997年、92-118頁。

異を<比較>する視点が重要性を持つてくるという。本稿もその点を前提として考察を進めたい。

本稿ではまず、当時のメディアの分析を通じて、帝国日本の観光空間において樺太がどのような位置づけであったのかを示したい。次に「オタスの杜」の先住民観光に焦点を当て、訪問者の記した紀行文などのテキストを参照しつつ、訪問者が対象化したオタスと住人達をどのように捉えたのかを検討する。ここで重要なのは、オタスやその住人達の実態がどうであったのか以上に、真偽に関わらずメディアに現れた言説が誇張や歪曲などの装飾がどのような表象であったのかを検討することである。

このようなテキストを材料に、本稿では人類学における「われわれ」と「かれら」、「異化」と「同化」の二分法を軸に、観光者がオタスの住人達に対して共感を抱いたか、あるいは侮蔑を抱いたかに着目して論を進めたい。筆者は、前者を「親和性」ベクトル、後者を「排他性」ベクトルと名付け、観光者の対象に向けたまなざしを分類したい。

1.2 先行研究

ここで樺太を舞台とした文学紀行、樺太に縁のある作品を集成した先行研究を挙げておく。荒澤勝太郎『樺太文学史』（Ⅰ～Ⅳ）、木原直彦『樺太文学の旅』（上・下）はともに解説を加えながら作品群を紹介している。一方、少数先住民に的を絞ったものとして、青柳文吉編、菊池俊彦序『サハリン北方先住民族文献集：文芸作品篇1905－1945』と菊池俊彦編『サハリン北方先住民族文献集：人類学・民族学篇1905－1945』がある。川村湊の『南洋・樺太の日本文学』は植民地文学とは何かを問う論説で「氷の島と雪の海」の章で樺太文学を扱っており、戦後のものも含め少数先住民を扱った作品についてもかなりの紙幅を割く。

本稿の主題である先住民観光については、佐々木亨「樺太先住民文化と研究・観光・展示」が3方面から多角的に概説している。また、「オタスの杜」に関する近年の成果としては田村将人「一九二〇年代のサハリン先住民族の移動と国境の関係性：樺太庁による『オタスの杜』集住化」があり、その成立過程も含め詳細に論じられている。本稿でも最後に触れるが、ナショナルイベントに関して池田裕子「一九二五年の樺太における「国民統合」：皇太子の行啓を中心に」が皇太子の樺太行啓を詳しく論じている⁽¹³⁾。

(13) 書誌情報は以下の通り。荒澤勝太郎『樺太文学史』（Ⅰ～Ⅳ）艸人社、1986年および1987年；木原直彦『樺太文学の旅』（上・下）共同文化社、1994年；青柳文吉編『サハリン北方先住民族文献集：文芸作品篇1905－1945』北海道大学大学院文学研究科、2005年；菊池俊彦編『サハリン北方先住民族文献集：人類学・民族学篇1905－1945』北海道大学大学院文学研究科、2006年；川村湊『南洋・樺太の日本文学』筑摩書房、1994年；佐々木亨「樺太先住民文化と研究・観光・展示」小西雅徳編『石田収蔵：謎の人類学者の生涯と板橋』板橋区立郷土資料館所収；田村「一九二〇年代のサハリン先住民族の移動と国境の関係性」原ほか編著『日本帝国の膨張と縮小』；池田裕子「一九二五年の樺太における『国民統合』：皇太子の行啓を中心に」原ほか編著『日本帝国の膨張と縮小』。

これら先行研究に対して、本稿の意義は以下の点にあると考える。第一に、日本統治下の樺太観光の全体像を、新聞・雑誌・その他メディアの言説を網羅的に収集・整理・分析して描き出したという点である。第二に、「オタスの杜」の先住民観光をメディア分析によって明らかにする際に、訪問者の言説を論評するだけでなく、「親和性」と「排他性」の両ベクトルの設定で数値化して考察した点である。

2. 帝国日本の観光空間

2.1 旅行雑誌『旅』が映す世界

樺太の観光そのものを議論する前に、まず日本における最古かつ最長の歴史を持つ旅行雑誌である『旅』が世界のどの地域を取り上げてきたのかを数値化しておきたい⁽¹⁴⁾。創刊当初、日本旅行協会が母体となっていた『旅』は、協会が1934（昭和9）年にジャパン・ツーリスト・ビューローに吸収合併され、日本旅行倶楽部が発足したことで編集発行が倶楽部に引き継がれる。もとより協会は鉄道省と深い関わりがあり雑誌も鉄道省の意向を汲んでいたが、倶楽部の発足により正式に鉄道省の広報雑誌となった⁽¹⁵⁾。倶楽部発行下、太平洋戦争時に「旅行指導雑誌」という副題も付され国策雑誌と化し、戦中の1943（昭和18）年9月に休刊する⁽¹⁶⁾。

1929（昭和4）年から1943（昭和18）年までの同誌の巻・号の記事タイトルに現れる「外地」と「外国」の地名を分類して出現数をまとめた（資料1：欠号あり）。全般的に見て、すでに帝国日本に包摂されていた「外地」の記事は大きな変動なく推移し、帝国の膨張と軌を一にするかのように、満州、支那・香港、蒙古、「東南アジア」（仏印・蘭印・フィリピン・ビルマほか）⁽¹⁷⁾の記事が相次いで増加する。人類学者の探検的調査は軍部の支援によって新たな占領地でいち早く実施されたが、『旅』の編集方針を見ると観光が調査を追いかける傾向を見てとれる。

特筆すべきは、この時期すでにいち早く植民地として組み込まれ、観光地として認知されている台湾以上に、「樺太・千島ほか」（境界地域として宗谷・カムチャッカを含めている）の出現数が上回っている点であろう⁽¹⁸⁾。ここには編集の意図が感じられる。

(14) 1924（大正13）年に創刊され2012（平成24）年に休刊となった同誌のうち、本稿では戦前戦中に刊行された号を概観する。なお「外地」と「外国」を対象とし「国内」は扱わない。

(15) 工藤泰子「戦時下の観光」『京都光華女子大学研究紀要』第49号、2011年、51頁。

(16) 1943（昭和18）年9月号での『旅』誌の「廃刊」は時局下の用紙統制による（日本交通公社編『日本交通公社五十年史』財団法人日本交通公社、1962年および日本交通公社編『日本交通公社七十年史』財団法人日本交通公社、1982年）。なお本雑誌は、情報局との折衝の末、『旅』誌に連続する形で『交通東亜』誌が10月に創刊し1945（昭和20）年2月の空襲まで続いた。以上は赤井正二『交通東亜』とその周辺：戦争末期の旅行規制をめぐる軋轢『立命館産業社会論集』第51巻2号、2015年、35-55頁を参照。

(17) 当時「東南アジア」という呼称はまだないが便宜的に用いている。

(18) 当時千島列島は北海道に編入されていたが、樺太と千島を一括したのは旅行対象として見た場合に北方

【資料1】 雑誌「旅」の記事タイトルに現れる「外地」と「外国」の地名分類と出現数

	台湾	樺太・千島ほか	朝鮮	南洋・小笠原	満州	支那・香港	蒙古	ヨーロッパ	ソ連・ロシア	アメリカ	(東南アジア)	その他
1929年 11ヶ月分	1	0	9	1	6	0	0	2	0	0	0	1
1930年 12ヶ月分	3	2	4	2	0	2	0	2	2	2	0	0
1931年 12ヶ月分	2	2	6	2	7	8	0	0	0	0	0	0
1932年 12ヶ月分	2	4	4	2	11	0	0	2	1	1	0	0
1933年 12ヶ月分	0	10	2	1	8	4	0	0	0	0	1	0
1934年 10ヶ月分	5	5	1	0	8	0	0	5	1	0	0	1
1935年 12ヶ月分	7	2	11+特集1	4	2	4	0	24	2	3	1	2
1936年 11ヶ月分	1	0	2	2	8	4	0	4	2	1	3	4
1937年 11ヶ月分	1	4	1	2	6	20+特集2	2	8	0	2	0	9
1938年 11ヶ月分	0	0	5	1	4	34	5	11	0	2	3	16
1939年 12ヶ月分	1+特集1	1	0	1	2+特集2	28	5+特集1	13+特集3	0	3	3	7
1940年 12ヶ月分	1	1+特集1	1	4	5+特集1	19+特集1	3	18+特集1	1	0	11+特集1	10
1941年 12ヶ月分	2	7	2	2	0	23	6	9	3	0	21	7
1942年 12ヶ月分	2	2	1	0	4+特集1	19	0	2	1	2	22	7
1943年 8ヶ月分	0	0	3	0	2	15	0	1	1	0	31	3
合計	28+特集1	40+特集1	52+特集1	24	73+特集4	180+特集3	21+特集1	101+特集4	14	16	96+特集1	67

2.2 外国人向けガイドブックが描く樺太

外国人にとって樺太は観光対象としてどう映ったであろうか。戦前の外国人向けガイドブックの公的な発行は1914（大正3）年と1941（昭和16）年と2度ある。1914年は、前述したジャパン・ツーリスト・ビューロー（外客誘致のために日本で初めて1893（明治26）年に設立された「喜賓会」の後継組織）が設立された1912（明治45）年の2年後であり、東京駅舎が完成した年である。他方1941年は、すでに日中間や欧州での戦乱のただ中であり、戦前の訪日外国人数と日本人国内観光客数がともにピークを記録した1936（昭和11）年から5年経過していた。

まず、*An Official Guide to Eastern Asia Trans-Continental Connection Between Europe and Asia*⁽¹⁹⁾において、樺太の地名に関してはToyohara, Otomari, Mauka, Notasan, Tomari-oro, Kushun-nai, Nayoshi, Shikka の8箇所の町の名前を記すのみである。そのうちShikkaについて見ておく。

“Shikka, situated on the E. coast at the mouth of the R. Horonai, is an important distributing centre for the game hunters and the aborigines found in the valley of the Horonai and near the frontier. It contains the Shikka Prefectural Office; the population is 278 (1910).”

南樺太の日本領有からわずか9年であるが、すでにこの北緯50度線近くの敷香も狩猟や先住民を対象とした観光の目的地となっていたことがわかる。

の僻地という共通点を有するからであり便宜的なものである。

(19) *An Official Guide to Eastern Asia Trans-Continental Connections Between Europe and Asia Vol. III North-Eastern Japan* (Tokyo: The Imperial Japanese Government Railways, 1914).

ついで、*Japan The Official Guide*⁽²⁰⁾は全898ページの大著で、台湾・朝鮮も含め全体で43のルートで日本を紹介している。南樺太はRoute22. Karahutoで登場し、Odomari, Toyohara, Karahutotyo Museum, Karahuto-zinsya Shrine, Sakaehama, Sikuka, Otasu, Maoka, Noda, Kusyunnai, Esutoru, Hontoの12の項目を並べる。そのうち観光地は3箇所のみであるが、「オタスの杜」も含まれている。町名Sikukaと観光地Otasuについて見ておく。

“Sikuka (152,2m. from Otiai; Inns: Ymagataya, Sakuraya), terminus of the Karahuto Railway, is on the River Horonai and one of the trading centers on the island.” “Otasu, on the other side of the River Horonai, is a wooded village where 500 Orocco (Oroke) aborigines live in a primitive manner. A motor-boat is available from Sikuka.”

このガイドブックでは、たった3箇所しか挙げられていない観光対象の中に、帝国の支配の象徴である神社(日本領の証としての宗教施設)、博物館(支配を明示する文化装置)と並んでオタスが列挙されていることが目を引く。オタスが被支配少数先住民を陳列する観光名所として象徴化されている。

3. 現地メディアから見る樺太の観光資源の概要

3.1 観光資源の分布

本節では樺太の観光資源の概要について述べたい。管見の限り、『樺太年鑑』(昭和8年度版)ほど詳細に樺太観光地を紹介したものはない⁽²¹⁾。詳細は割愛するが、年鑑にどのような観光資源が掲載されていたのかを、南樺太を南部、西海岸北部、東海岸北部に区分して地域ごとに検証した(資料2)。

全般的な傾向を見ると、各地域に満遍なく自然および文化の観光資源が存在しているが、製紙や人絹パルプなどの工場や炭鉱などを巡る産業観光(インダストリアル・ツーリズム)が大きな割合を占めているのが特徴的である。

地域別に所在を見ると、開発の進んでいた南部地域に観光資源が集中していたことは当然として、人口希薄な東西海岸北部地域にも偏りなく分布していた。特に東海岸北部地域は人口希薄にもかかわらず、西海岸北部地域と同程度の観光資源を有している。さらに付記すると、同年鑑には旅行者向けの注意書きとして、「日ソ郵便国境交換の沿革と現在 在亜港総領事館 佐々木静吾」、「日ソ国境見物者に対する注意と希望(日ソ国境観念の相異) 在亜港帝国総領事館 佐々木静吾」という2つのコラムが掲載されている。当時においてもい

(20) *Japan The Official Guide* (Tokyo: The Imperial Japanese Government Railways, 1941).

(21) 他に公的出版物として樺太庁鉄道事務所編『樺太の鉄道旅行案内』(樺太庁鉄道事務所、1928年)が多数の観光情報を掲載している。ただし同書は鉄道の駅ごとの名所案内で、しかも刊行された1928年の樺太の鉄道網はまだ十分とは言えず、樺太全域を網羅した調査には適さない。

【資料2】 樺太における観光資源の地域別所在状況

観光資源		南部	西海岸北部	東海岸北部
自然資源	01山岳	2		3
	02高原・湿原・原野			1
	03湖沼	3	1	4
	04河川・峡谷	3	1	
	05滝			
	06海岸・岬	2		
	06-a島			1
	07岩石・洞窟			
	08動物		1	
	09植物	3		1
10自然現象		1		
文化資源	11史跡	8	2	
	12神社・寺院・教会	4		
	13城跡・城郭・宮殿			
	14集落・街	1	1	
	15-a郷土景観（農村）	3	5	1
	15-b郷土景観（土人部落）	1	2	2
	16庭園・公園	2		
	17-a建造物（官公庁・学校・病院）	7	3	3
	17-b建造物（工場）	8	3	1
	17-c建造物（その他）	8	5	3
	18年中行事			
	19動植物園・水族館			
	20博物館・美術館	1		
	21テーマ公園・テーマ施設	1		
	22温泉	2		1
	23食			
	24芸能・興行・イベント			1
25国境		1	2	
合計		59	26	24

※南部とは9支庁時代の豊原庁、大泊庁、留多加出張所、本斗支庁、真岡支庁を指す。

※西海岸北部とは9支庁時代の泊居支庁、鶴城出張所を指す。

※東海岸北部とは9支庁時代の元泊支庁、敷香支庁を指す。

（観光資源の分類は日本交通公社の観光資源台帳に従ったが、太字部分は当時の樺太の実情に合わせて適宜修正している。）

かに国境観光(ボーダーツーリズム)が盛んであったかがうかがい知れよう。

『樺太日日新聞DB観光編』⁽²²⁾に保存されている4365件の観光関連記事を支庁ごとに集計した(資料3)。支庁名は9支庁⁽²³⁾時代のものである(図1参照)。検索結果に1935(昭和10)

【資料3】 『樺太日日新聞』観光関連記事の地域別出現数と観光資源の地域的偏重

支庁名	記事数(件)	人口(人)	面積(km ²)	人口密度(人/km ²)	人口密度当たりの記事出現数 (記事数/人/km ²)
豊原支庁管内	430	64882	4750.5	13.7	31.4
大泊支庁管内	277	46679	3215.4	14.5	19.1
留多加出張所管内	44	16397	1627.6	10.1	4.4
本斗支庁管内	120	22368	1566.6	14.3	8.4
真岡支庁管内	196	47917	2490.1	19.2	10.2
泊居支庁管内	37	21523	1737.2	12.4	3
鶴城出張所管内	3	36320	5165.5	7	0.4
元泊支庁管内	5	26274	3120.9	8.4	0.6
敷香支庁管内	117	40155	12416.5	3.2	36.6

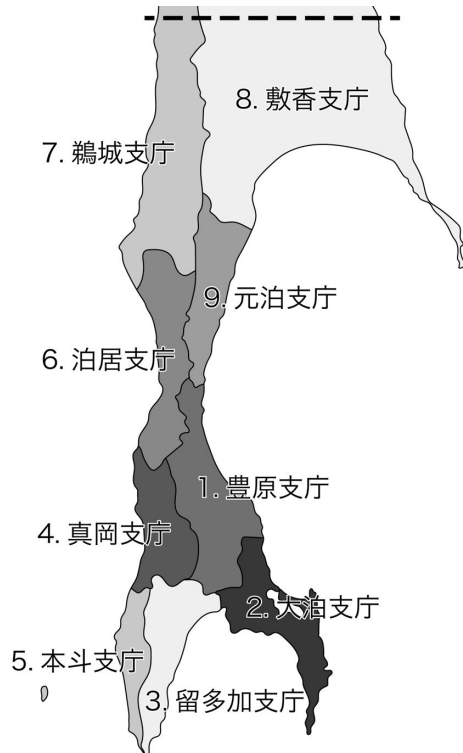


図1 樺太の支庁

(22) 大谷あやの、中山大将編『樺太日日新聞DB観光編』京都大学東南アジア地域研究研究所CIRAS、2018年
[https://app.cseas.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311kbnc1004SIGH] (2024年2月28日閲覧)。

(23) 樺太における支庁の変遷は複雑である。地域の特徴を把握するために最も支庁数が多かった9支庁時代の地域区分を選んだ。これは1922(大正11)年から2年間しか続かなかった。

年当時の人口、面積および人口密度を対比させた⁽²⁴⁾。樺太の中心都市が所在する豊原支庁の記事数が突出しているのは当然として、人口密度との関連から言えば敷香支庁の記事数は117件と極めて多い。これは先に述べた通り東海岸北部地域に観光資源が多いという点とも一致する。記事数を人口密度で割った値(件/人/km²)で見ると、豊原支庁管内が31.4であるのに対し、敷香支庁管内は36.6と樺太9支庁のなかで最高値を示している。いかに敷香支庁が観光面で注目された場所であったかがわかる。

3.2 観光事業の概要

地域独自の観光事業としては、樺太観光協会のそれが挙げられよう。1934(昭和9)年に樺太商工会議所連合会によって設立が決定された協会の目的は、「樺太固有の自然美、歴史ならびに産業等をひろく内外に紹介宣伝して、内外の観視察客の誘致を図ると同時に来島視察客の旅行が便利にかつ愉快なものになるよう、各種接客機関の施設の完備、ならびに接客業者のサービス改善促進を図り、樺太拓殖発展に資することである」⁽²⁵⁾とする。個人の観光客の誘致はもとより、当時は視察と称する団体旅行客が毎年多く来島していたため、彼らに便宜を図ることが産業発展に重要であると認識されていた。以降毎年各種の事業を実施しており、例えば1937(昭和12)年度の新規事業として以下が挙げられている。

「施設に於ては記念スタンプの作製、本島観光ニュースの設定、観光地帯及び観光道路の改善設備、調査に於ては全島一周観光コースの調査、名勝地及び観光地の調査、宣伝に於ては宣伝用パンフレットの作製は勿論、各方面発行の観光新聞、雑誌による宣伝等」⁽²⁶⁾。

さらに重点事業として、「島内観光ルート設定の計画」と「樺太東海岸の旅を映画に撮影紹介」の二項が掲げられている。

これら新規事業の事項のうちどこまで実現されたのかは不明だが、当時の樺太が積極的に内外から観光客を誘致しようとしていたことがわかる。同協会として特に観光に力を入れようとしていたのが敷香である。

「△敷香の観光価値の積極的宣伝

「敷香を観ずに樺太を語る勿れ」と称されているほど、敷香は本島各地中観光地として最たるにも関わらず、未だ観光協会の支部が設置されていない。支部は商工会議所所在地のみに設置することになっているからである。そのため、敷香商工会が主体となり樺太観光協会とは別個に敷香観光協会を組織し、観光地敷香を島内はもちろん、内地各方面に大々的に宣伝すべくポスターならびにパンフレットの意匠その他につき目下考案中である。樺鉄の全通によ

(24) 人口については『樺太年鑑』(昭和10年度版)樺太敷香時報社を参照した。

(25) 『樺太年鑑』(昭和12年度版)、374頁。

(26) 『樺太年鑑』(昭和12年度版)、375頁。

って本年は昨年以上に観光客を誘致しようとしている」⁽²⁷⁾。

「樺鉄」とは民営の樺太鉄道株式会社のことである。官営の樺太庁鉄道の落合駅から敷香駅までを樺鉄が順次開通させていき、全線開通したのが1936（昭和11）年である。つまり、上に示した樺太観光協会の新規事業は、前年の樺鉄の敷香までの延伸開業を踏まえたもので、敷香の観光宣伝もその延長上にあった。

4. 敷香が描く「エキゾチック シクカ」

戦前の樺太観光において東海岸北部地域の敷香支庁管内が際立っていることを述べた。その中心地である敷香⁽²⁸⁾は北緯50度線に近く当時の日本領最北端の都市であった。元来漁業が盛んな町であったが、後に森林資源が注目されて木材が搬出されるとともに製紙工場や人絹パルプ工場が設立され、近郊の内川には炭鉱も開かれ一大新興都市となった。一方、北緯50度線の日ソ国境まで100kmあまりと近く軍事的にも重要な拠点であった。

当地は日本領内で最も寒冷な気候で、ツンドラや樺太アマゾンと称された国際河川幌内川を擁し、「オタスの杜」や国境という異国情緒あふれる場所があり、多来加湖や海豹島という自然景観も支庁内にあった。それだけでも観光客を魅了し、「敷香を観ずに樺太を語る勿れ」と言われたほどである。

『敷香町勢要覧』には、「エキゾチック シクカ」と題する章が設けられており、土地の者が自らの観光資源を紹介している。ここでは文化資源としての「土人部落」と国境碑について見る。双方とも帝国北端の境界地域だからこそ体験できた観光である。

「▲土人部落：本部落は約五拾年前露領時代北樺太より移住し幌内川流域に三戸乃至六戸多きは十戸内外の集団を以て点住せり。漁業、狩猟を生業とし傍ら馴鹿の放牧をなして生活して居たが領有後樺太庁に於て土人保護の目的にて土人専用漁場管理の制を設け保護指導するに至り今日の部落を形成するに至ったものである。…

▲国境碑：…明治三七、八年日露戦争の結果樺太が我領土となった際北緯五十度を割し国境画定委員の手によって国境碑を建てた。国境碑は花崗岩で縦二尺、横一尺五寸ほどのもので邦領に面した部分には菊を、露領に面した方には双頭の鷲を何れも国紋を刻み、その外柵を二間四方ほど廻らしてある。視察者は紋面に草汁を或ひは墨汁を塗布しハンカチ又は紙に是を押し刷して国境視察の記念にする者が多い。

敷香町市街より約廿七里で、冬は馬橇で四日、夏は自動車で一日(何れも往復)此の国境視察ができる。亦、冬期は此の国境半田に於て毎週木曜日に、国境警備隊(半田警部補派出所)立会の下に日露間の国際郵便交換が行はれる」⁽²⁹⁾。

(27) 同上、376頁。

(28) 敷香は一般にはシスカと呼称されたが官庁での正式名称はシクカである。他にシッカとも称されることがあった。

(29) 「エキゾチック シクカ」敷香町役場編『敷香町勢要覧』敷香町役場、1933年を参照。

これらの記述から、敷香という町それ自身が、異国情緒、境界性、隔絶性といった記号を自らまとうことによって他にはない独自色を際立たせ、それら記号をメディアに乗せて内外に広報しようという姿勢が強く現れている。

5. 旅人の眼に映じた「オタスの杜」：『旅』誌掲載記事に記された「オタスの杜」

「オタスの杜」は敷香市街から幌内川を渡る蒸気船オタス丸で結ばれ、市街地から約1kmと近く物珍しさから観光対象として脚光を浴びた。先の『樺太日日新聞』のデータベースで「オタス」という語を検索すると1933（昭和8）年から1940（昭和15）年にかけて42件の記事が該当する（資料4）。「敷香」の検索結果が117件であったことは先に述べた通りであるから、敷香に関わる観光記事の4割近くが「オタスの杜」関連ということになり、それだけ同地は重要な観光資源であったと言える。さらに、「オタスの杜」関連記事出現数と鉄道開通との関連についても見る。敷香まで鉄道が開通したのは先述の通り1936（昭和11）年8月30日であり、開通以前の3年半の間の記事は13件、開通以後の4年半の間の記事は29件である。年間当たりの記事数は、開通以前が3.7件／年、開通以後が6.4件／年となり倍近い開きがある。鉄道の開通が誘客効果をもたらしたと言えよう。

雑誌『旅』についても「オタスの杜」関連記事は多い。同誌で1929（昭和4）年から1943（昭和18）年までの15年間に「樺太・千島ほか」の地域を取り上げた記事は特集を除き全部で40件あり、それら記事タイトルを年ごとにまとめた（資料5）。そのうち「オタスの杜」に言及しているのは7件を数える。

その中から、著者個人の主観的感情が表出されている言説を検討する。当時の少数先住民に対するまなごし的一端がうかがい知れよう。具体的方法としては、まず前提として、著者がオタスの住人達に対して共感を抱いて「われわれ」の側に引き寄せようとする筆致で描いた言わば「親和性」ベクトルと、侮蔑を抱いて「かれら」の側に押しやろうとする筆致で描いた「排他性」ベクトルを設定する。その上で、主観的表現と判断しうる部分を抽出し、「親和性」（ で表示）あるいは「排他性」（ で表示）を判定する。その際、筆者の主観を可能な限り排して客観的な判定となることを目指して、『NINJAL-LWP for TWC』（筑波大学、国立国語研究所、Lago言語研究所）⁽³⁰⁾を利用し、該当部分の各品詞について他の多数の用例を参照しつつ公平を期するよう努めた⁽³¹⁾。

(30) 日本語のウェブサイトから収集して構築された約11億語のコーパス『筑波ウェブコーパス』（Tsukuba Web Corpus: TWC）を検索するためのツールである [https://tsukubawebcorpus.jp/]（2024年2月28日閲覧）。

(31) なお主観的表現が見られない2件、樺太全体を扱い「オタスの杜」への言及が少ない竹内白鷺「樺太を語る（2）」『旅』第10巻4号、1933年34-37頁と敷香の町を紹介した記事M・A・K「敷香（街の断面圖）」《1937年14（6）》は除外した。

【資料4】『樺太日日新聞』の「オタス」関連記事一覧

年	月日	記事タイトル
1933年	昭和8年	7月23日 「避暑客を招け夏の樺太へ」
1934年	昭和9年	1月31日 「冬の樺太映画化 横浜シネマが撮影に着手 産業方面も撮影」
		7月10日 「帝都の名士を集め海豹島視察団 本月下旬来島に決定」
		8月23日 「旭商主催樺太産業視察団きょう旭川を出発」
1935年	昭和10年	8月10日 「景勝地紹介の名所スタンプ 更に八局を増加して十一日から使用」
		9月22日 「“樺太の観光”豊、泊、真で上映 目下敷香地方撮影」
		9月26日 「殖民地気分を一掃 情緒豊かな郷土建設へ 敷香町の都市計画」
		10月3日 「“観光の樺太東海岸”知商で名所案内を製作 全国会議所へ送付」
1936年	昭和11年	3月25日 「共進会を好機に“国境の町”敷香を宣伝 極力オタスの美化に努めて 北緯五十度線に於ける遊園地とせん」
		5月12日 「渡船おたす丸 公園化の第一歩」
		6月2日 「オタスの杜面目一新 着々進む公園施設」
		7月1日 「海豹島の猟奇求めて今年も大観光団 八月東京から二百名来島 斤鉄手管を整う」
		8月10日 「真の樺太は奥地の旅に！国境線は旅人を待つ」
		8月30日 「観光敷香の誇りは！！ 国際河川、オタス、国境線等々」
		9月12日 「オタスの渡し 見事に黒字 民間から旧に復せの陳情」
		11月12日 「“オタスの杜”見物人 七千人の多数 渡船の直営は大当り」
1937年	昭和12年	1月7日 「フィルムになる樺太の冬山 オタスの杜から著名グレンデ パノラマ化され帝都へ」
		4月9日 「東西奥地へ観光団組織計画 斤鉄がコースを研究中」
		5月3日 「オタスの公園化 遊覧船を新造の計画」
		5月19日 「観光のシーズンに腕を撫す旅館業者廿日全島の協議会開く」
		5月20日 「オタスの遊覧化」
		5月31日 「観光シーズン近づきハリキる敷香町 オタスの杜も面目一新」
		7月2日 「祝市制施行記念観光祭特輯 躍る黒潮宗谷を渡り拓け樺太夢の島 酷熱焦土の南から北へ！銷夏！北国の旅路」
		7月4日 「オタスの青年道場」
1938年	昭和13年	4月1日 「岡田嘉子微笑笑 越境事件を観光客誘致に利用 宣伝のうまい敷香町」
		5月14日 「観光敷香宣伝にサービス改善座談会」
		5月20日 「オタス丸新造」
		5月20日 「敷香観光協会役員募集」
		6月23日 「オタスの杜異変 知取の観光客数十名を奪われて 土人事務所は憤慨」
1939年	昭和14年	4月11日 「宣伝も御遠慮 消極的な観光協会」
		5月24日 「敷香雑信」
		6月8日 「誇る我等が樺太八景 讀えよ郷土の景勝地 全島に昂る白熱の人気」
		6月9日 「鎬を削る“名勝”争い 郷土の誇りに賭けて猛運動 山積する投票用紙」
		6月16日 「“名勝八景”の選定に息詰まる争覇戦 頭角を抜く富内湖」
		6月22日 「来知志湖が一位 番狂せの樺太八景」
		6月29日 「どうぞオタスへ 売店まで開設サービス」
		7月15日 「オタスの民謡を広く全国に紹介 海豹島の交響楽も」
		8月4日 「伸び行く北部の産業視察団募集」
		8月5日 「夏の観光を賑す 観光団体のトップ 北海道吏員視察団」
		10月6日 「史蹟名勝天然記念物きのう文化評定 郷土の誇りを慎重協議」
1940年	昭和15年	8月8日 「オタス丸も商売上ったり」
		8月18日 「絵になった樺太三十三景」

【資料5】 雑誌『旅』に見られる「樺太・千島ほか」の記事一覧

年	巻・号・フルナ	記事タイトル	著者	ページ	「オタスの杜」の記述あり	
1930年	昭和5年	7(4)(73)	サガレンの旅	林静夢	p88-95	
		7(8)(77)	樺太回想記	小能四點	p134-138	
1931年	昭和6年	8(8)(89)	樺太の奥地へ	澤田雄三	p18-21	
		8(9)(90)	樺太の旅(2)	澤田雄三	p10-15	○
1932年	昭和7年	9(8)(101)	口繪 樺太海豹島 眞鶴岬 天城山 南豆三濱附近 沼津市の鳥瞰 三保全景 夏の海港二題		p1-4	
		9(8)(101)	夏を知らない北千島とカムチャツカへ	市橋鷲峰	p28-35	
		9(8)(101)	冷涼なる氷山監視船	森澤徳太郎	p72-76	
		9(11)(104)	樺太を語る(一)	竹内白翳	p123-125	
1933年	昭和8年	10(3)(108)	グラフセクション 桃を尋ねて、奈良の春。京の浅春。淺草寺、金剛峯寺金堂完成。老樹と名木、宗谷丸。樺太の風物。橋めぐり。會員旅館。		p16-31	
		10(4)(109)	樺太を語る(2)	竹内白翳	p34-37	○
		10(6)(111)	千島列島を探る(國後島の巻)	寺島柁史	p74-82	
		10(7)(112)	千島列島を探る(色丹島の巻)	寺島柁史	p56-63	
		10(8)(113)	極北の[神]秘境--海豹島へ	澤田雄三	p24-28	
		10(9)(114)	樺太の泥火山	澤田雄三	p74-75	
		10(9)(114)	千島列島を探る--(擇捉島の巻)	寺島柁史	p82-89	
		10(11)(116)	樺太への旅	樺太塵鐵道事務所	p56-58	
		10(12)(117)	千島列島を探る--得撫、知里保以の巻	寺島柁史	p138-144	
	1934年	昭和9年	11(1)(118)	千島列島を探る(新知郡諸島の巻)	寺島柁史	p40-45
		11(1)(118)	樺太土人の昨今	澤田雄三	p84-87	○
		11(3)(120)	樺太土人の昨今(2)	澤田雄三	p104-107	○
		11(4)(121)	千島列島を探る(占守・幌筵の[巻])	寺島柁史	p20-28	
		11(8)(125)	涼しい海の旅 北洋の夏を憶ふ--リリカルな山・海	寺島柁史	p100-102	
1935年	昭和10年	12(9)	北千島をゆく	渡邊公平	p50-54	
		12(9)	山島旅情--その一 北方の歌	長尾宏也	p88-93	
1937年	昭和12年	14(3)	特別讀物 臘虎船奇譚	熊野三郎	p106-106	
		14(4)	オタスの杜のこのごろ	千葉恒雄	p60-62	○
		14(6)[90]	初夏の色丹を探る	館脇操	p12-14	
		14(6)[90]	敷香(街の断面圖)	M・A・K	p114-114	○
1939年	昭和14年	16(4)	カムチャツカ漁場を語る	山中圭尊	p8-11	
1940年	昭和15年	17(8)	最近踏査 樺太の北の涯まで 銀黒狐の村 ツンドラの曠野 遙けし 國境に夏近く 西海岸四百四十軒 港の灯	古林善治	p50-66	○
		17(8)	特輯グラフ 第二特輯・グラビア [逞しき樺太の躍進] 水産樺太 本斗附近の干鰯製造、榮濱の鮭積み、一網千兩の鯨漁、眞岡の蟹籠工場、天然資源の寶庫 原生林、材木を流す、材木を製紙工場へ運ぶ、美事な巻取紙、観光の樺太 近代都市豊原、樺太神社、遠瀨湖、オタスの杜、馴鹿の群			
1941年	昭和16年	18(2)	酷寒と闘ふ職域		p28-29	
		18(2)	稚泊航路の水と碎氷[船]	大沼行一	p28-30	
		18(7)	北千島に居住する人	村山尙寛	p18-21	
		18(10)	郷土と先覺 サハリーンと間宮林藏	佐々木千之	p39-41	
		18(10)	郷土と先覺 北海探検の木村謙次	杉田雨人	p42-43	
		18(11)	北千島の風物	館脇操	p26-28	
		18(11)	住んでみた北樺太	浦田錦三	p22-24	
1942年	昭和17年	19(6)	海獣王國ベering海	祥瑞専一	p54-56	
		19(9)	アツツ島の想ひ出	館脇操	p12-14	

5.1 「樺太の旅(二)」澤田雄三《1931年8(9)》10-15ページ

樺太の要所を巡る連載記事の第2回目で、全6ページ・2段・20行・17字で全文約4000字あり、オタスに関する部分は22行で約370字ある。抽出部分は139字で全体の約3.5%である。

「…遊牧民族が馴鹿と共に原始的キャンプ生活を営んでゐるが是等世界的弱小民族の教化薫育の機算として、土人教育所があり…口馴れぬ日本語で国歌を唄はせられると何となく涙ぐまらずには居れなかつた、このエキゾチックなローカルカラは全く、敷香町の上に與へられた、本國に於ける唯一無二のものであらう。…」

この文章は、教育の取り組みについて触れている。「排他性」とした2箇所は彼らの後進性と弱小性を表すが、それが「土人教育所」での子供達への教育の成果を強調する効果をもたらしている。子供達が日本の国歌を歌うことができるようになったことについて、「涙ぐまらずには居れなかつた」という感動は「親和性」を表出しているものの、それが薫育の成果が出たというプラスの感情であるか、あるいは子供達の境遇に対する憐憫というマイナスの感情であるかは判然としない。最後に、こうしたエキゾチックな瞬間は敷香でしか経験できないものとして評価している。

5.2 「樺太土人の昨今」澤田雄三《1934年11(1)》84-87ページ

樺太先住民を紹介する連載記事の初回で、各民族を取り上げる前段で全体の概要を述べた部分から抽出する。全4ページで、1ページ目は2段・12行・上段12字下段19字、2ページ目は3段・20行・19字、3ページ目は3段・20行・上段15字中下段19字、4ページ目は2段・20行・19字で全文約2700字からなる。概要の部分は約730字であり、抽出部分は295字で全体の10.9%である。

「…彼等は昔ながらに水草を逐ふて、殆ど定業を有せず、依然として無為徒食し、其生活ぶりや、頭の働方は旧土人アイヌにも劣り、全く無智そのもので、ものの数は愚、蒔ことすら知らず、唯だ山に川に幼稚な一手馴れた一方法で漁獵する以外に生活の道を知らない。

是れが往昔アジア大陸に磐根して、彼の肅慎-渤海-女真等を建國し、こえて金-清…と数百年間の支那史上に没すべからざる、輝かしい足跡を印した大民族の子孫であらうとは…?

転変極まる處を知らぬ時代の流は、遂に彼等の子孫を斯かる流転の生活に叩き込んで終つて、今は皇國日本の保護指導なくては、生き行けぬ現実とはなつた。

今、是等敗殘種族の生活を語る前に、…」

この文章は、樺太先住民が歴史的な転変と変化の過程を経て、現在は日本帝国の保護と

指導を必要としている状況を述べている。前半では、8箇所にも及ぶ「排他性」の字句を並べ、彼らの生活の後進性や不変性が強調されている。また、彼らの知識や技術での遅れや智能の低さが指摘されている。後半では、民族の歴史的栄光に触れ、彼等が数世紀に渡ってアジア地域を跋扈したことを述べ、この部分に「親和性」の字句が3箇所現れるが、しかしそれは時代の流れや歴史の変化により現在は日本の指導的立場が必要であるという状況を正当化する意味をも示唆しているだろう。総じて、この記事は「排他性」のベクトルが極めて強く作用していると言える。

5.3 「樺太土人の昨今(2)」澤田雄三《1934年11(3)》104-107ページ

前段の連載の続編で、樺太先住民の習俗や日常を紹介している。なお5.1から5.3の記事は同じ著者の筆による。全4ページで、1ページ目は2段・20行・上段14字下段19字、2ページ目以降は3段・20行・19字で全文約3200字からなる。抽出部分は「彼等の習俗」中の「葬式」の節と「彼等の日常」中の2箇所で647字あり、全体の20.2%である。

「(彼等の習俗：葬式) …オロッコ人は固有の天葬である。…先ず屍体を洗ひ浄め、華かな衣服をまとはせ、黒布を以て両眼を覆ひ、脱落を妨ぐために眼窩の辺りをデスクピンで押し止めるが、如何に土俗とは言へ實に無惨な気がして正視に堪へぬものがある。…」

「(彼等の日常) …是等の民族中ヤクート族、即ちウイノクロフ一家を除いては、殆ど一定の生業と称すべきものなく、野に狩り河に漁り無為徒食、唯だ生を自然に委せ切つてゐた、彼等弱小民族の生活を、根底から脅かしたものは、実に敏捷なシヤモ(和人)が奥地の山に、川に跳躍して以来のことであつた。

何時の頃からとなく、彼等は阿漕ならぬ禁漁の場所に、密漁の味を占めて、天下の御法度に反くものが増加して来た。彼等は狩猟、漁漁にかけては、アイヌ人同様ある意味に於ては、和人に比して一定の長を有すと、云はれてゐるが、近年に至つて、其の密漁方法が意表に出づるもの多く、そのズルさ加減には、取締の警官なども、ホトホト手を焼かされてゐると云ふが、昨年不況のドン底に喘いだ敷香町を、ともかく賑はしてくれたのは、彼等の夏鮭密漁のおこぼれであると言はれ、勿驚、其密漁の水揚げは五十萬圓を割るまいと称される豪勢さである。けれども貯ふるに吝かな彼等は、その多くを焼酎に代へて、依然として見る影もない、原始そのままの生活は今日尚改まらない。…

…ともかく、一度異國の気分濃厚な敷香町オタスの杜に、一步踏み込んで、うつし世の進化を知るや、識らずや、敗残の弱小アジア民族と、語る機会をつくらんことをお奨めして筆を擱く。」

この文章は、オロッコ人の葬式の習慣と、彼らの日常生活の記述から抽出した。天葬について、その中で特に眼窩の周りをデスクピンで留めるという民族固有の風習について、著者が「無惨」で「正視に堪えぬ」とした点を「排他性」の記述と判定した。次いでオロッコ人らの日常生活について触れており、彼らの生業が非常に質素で自然に頼っている様子

写について4箇所を「排他性」の記述とした。さらに密漁の問題に関わり、オロッコ人らの密漁の増加が地域の景気を支えているとする一方で、彼ら自身への悪影響が懸念されているとする。この部分では4箇所を「排他性」の記述と判断した。最後の締めくくりで著者は異国的な経験を味わうことを読者に奨めるが、ここでも『「敗残」の「弱小」アジア民族』という形容を「排他性」とした。「排他性」ベクトルの字句が計16箇所、「親和性」ベクトルの字句はない。5.1から5.3の記事は同じ著者の筆によると前述したが、この著者の傾向は一貫して「排他性」のベクトルが強く作用していると考えられる。

5.4 「オタスの杜のこのごろ」千葉恒雄《1937年14(4)》60-62ページ

タイトルの通り全体がオタスの杜を取材した記事である。そのうち強く個人の主観的感情が表出した部分を3箇所抽出した。全3ページで、5段・30行・14字で全文約3400字からなる。抽出部分は421字で全体の12.3%である。

「…他のオロッコ、ギリヤークの土人達は無智のものが多く、その生活態度もアイヌ族よりも低級である。常に優等種族のために圧迫せられ、極北寒地に余命を保ち、年とともに滅びゆく弱小民族のために、仮令国籍がないとしても放棄して置くべきではないと云ふので、樺太庁では積極的に土人の保護に乗り出し、此處に土人教育所を設けた。…かうした不遇な子供たちに憐憫と愛撫の手を差しのべて彼らの人となりを我が子の様に楽しんでゐるといふ。…」

「…酒の上の争ひが屢々あったが、これを自覚してアッコウノ、ショブライン、カリンチャノ、キウガノ、ホンニヤカ等が率先して、ぴったり酒を止めた。現在日本禁酒同盟會の會員として玄関先に會員標を掲げ、胸にはメタルをつけて、今では絶対に盃を手にしなさいといふから偉いものではないか…」

「…極北の桃源郷たるオタスの杜には今は文化の風が吹いて来て、原始のままの生活もゆるされなくなり、常に文明人に伍して生活様式を換へねばならないところに土人達の大きな悩みがある。」

第1段ではオタスの住人達の置かれた厳しく困難な状況が語られ、それへの対処から「土人教育所」が設けられたことを述べる。ただその過程で3箇所の「排他性」のある文言が並ぶ。著者としては、役所が不遇な子供たちに憐憫と愛撫の手を差しのべているという積極的な姿勢を示す意図があったのだろう。第2段では禁酒の取り組みを称賛しており、2箇所の「親和性」のある表現を見出した。第3段では「土人達」の将来を憂い同情している様子が感じられ、それが「悩み」という「親和性」の高い語に現れている。総じて、著者は第1段での否定的言辭を踏み台に第2, 3段での「土人達」への共感と同情を強調したいのだと考えられる。

5.5 「樺太の北の涯まで」古林善治《1940年17(8)》50-65ページ

特派記者と肩書きのある著者による樺太各地の訪問記である。豊原・小沼・知取・敷香・国境・恵須取・塔路・真岡・大泊などを回る。全体で16ページ強の長い記事で、「オタスの杜」に関する記述は2ページ弱あり約12%を占める。そのうち強く個人の主観的感情が表出した部分を1箇所抽出した。抽出部分は211字である。

「…(教員から)彼等は生活が不潔なため、皮癬など皮膚病の絶え間がなく、又雇ったら容易に治らない。虱の多いこと。次に時間の観念のないこと。昼食はその日の食物の有無でまちまちなので、授業に差支へること。洗濯や入浴をせぬため、海豹の油の浸みた、土人特有の臭気の抜けぬこと。などを挙げられた。要するに不潔と無智の二語に尽きるといへよう。生徒はいま男十人に女二十人の単級教授だ。女の方が倍から多いのは、やがて滅びて了ふ民族に現れる一現象ではないか。…」

この文章は、「土人教育所」の教員からの話を受けて、著者が個人の見解を述べている部分である。彼ら(ギリヤーク)の生活様式のうち食事の不安定さや洗濯、入浴の欠如、時間の観念の不足などが、子供達の教育に支障をきたしているという教員の話から、著者がギリヤークの人口減少と未来への不安について記している。女が男の倍以上いる状況は滅びゆく民族に現れる現象ではないかと根拠の無い懸念を抱いている。教員の話は伝聞であるから省き、著者の見解のうち3箇所を「排他性」のある文言として挙げた。

5.6 小括

これら5件の記事から、重複も含め合計10箇所の「親和性」ベクトルの字句と32箇所の「排他性」ベクトルの字句を抽出した。明らかにオタスの住人達を「かれら」の側に押しやろうとする筆致で描いた部分の割合が高い。そもそも観光とは日常から離れて非日常性を希求することであるから、観光対象として「われわれ」ではなく「かれら」が要請されるのは当然のことである。むしろ、ここで注目したいのは両ベクトルそれぞれの字句や表現の多様性の差である。「親和性」ベクトルでは「土人」を形容する字句や表現は多様性に富む。「土人」への共感や同情はそれぞれ個別具体的な状況に即して芽生え描写される。一方、「排他性」ベクトルでは、字句や表現が通り一遍であることが多く多様性に乏しい。

3件の記事については同一著者によるものであるから字句の重複や表現の似通りは致し方ない。けれども、残り2件を含めても同様のことが指摘できる。しかも、それは『旅』誌掲載の記事に限らず、「オタスの杜」を描いた他の出版物にも広く散見される傾向である。例えば、以下の2つの文章を比較してみる。

A:「優等種族のために圧迫せられ極北寒地に余命を保ち年と共に滅びゆく弱小民族、仮令国

籍を有しなくとも放棄しておくべきではないので土人事務所を設け、専務の指導員を置いて保護管理の方法を講じている。」樺太庁敷香支庁編『オロッコ土人調査其他』敷香支庁、1932（昭和7）年 30-31ページ

B：「常に優等種族のために圧迫せられ、極北寒地に余命を保ち、年とともに滅びゆく弱小民族のために、仮令国籍がないとしても放棄して置くべきではないと云ふので、樺太庁では積極的に土人の保護に乗り出し、此處に土人教育所を設けた。」「オタスの杜のこのごろ」『旅』千葉恒雄《1937年14（4）》

Aは樺太庁敷香支庁による調査報告書、Bは前掲5.4である。先住民が滅亡に瀕することを危惧して、Aでは土人事務所が、Bでは土人教育所が設けられたことを述べている。この2文は使用される字句と表現がほぼ同一である。それでは、次の2つの文章はどうだろうか。

C：「土人の生活は太古未開時代に於ける狩猟の状態で、魚族鳥獸を逐ふて転々其の居を移し、自然により自然に服し自らの生産する途を知らないのであるから、斯かる動物的生活から脱して人間的に生活せしめんとするには元より教育に俟たなければならない。」樺太庁敷香支庁編『オロッコ土人調査其他』敷香支庁、1932（昭和7）年 31ページ

D：「……彼等は昔ながらに水草を逐ふて、殆ど定業を有せず、依然として無為徒食し、其生活ぶりや、頭の働方は旧土人アイヌにも劣り、全く無智そのもので、ものの数は愚、蒔ことすら知らず、唯だ山に川に幼稚な一手馴れた一方法で漁猟する以外に生活の道を知らない。」「樺太土人の昨今」『旅』澤田雄三《1934年11（1）》

CはAと同じ報告書、Dは前掲5.2である。先住民の後進性や智能の低さを指摘した上で、Cでは教育の重要性を訴え、Dでは伝統的漁猟をするほかないと諦念を得ている。一見すると結論が異なり使用される字句や表現にも違いが見られる。ただし、その筆致や論の進め方は極めて似通っている。このように当時の出版物に表象された「オタスの杜」の住人達の像は極めて類似したものが多い。さらに、写真や図表の使い回しの例も散見される。

メディアが少ない戦前日本において、『旅』は当時の旅行愛好家のあいだで広く読まれた雑誌であったから、毎年何千人にも上った「オタスの杜」への旅行者の多くは当該記事に目を通した上で「オタスの杜」の観光に臨んだだろう。「土人」にまつわる類似した言説が反復され、それが旅行者の先入観を形成し、実際の観光にも大きな影を落とす。そこにはオリエンタリズムが再生産されていく過程が如実に現れていると言える。

言説の類似性の問題には、狭い紙幅に内容を簡潔に記述するという雑誌記事の特性からくる理由もあるだろう。次章では、文化人の手になる長文紀行の単行本を取り上げ検討する。

6. 文化人の見た異郷：長文紀行の単行本に記された「オタスの杜」

前節では、『旅』誌に掲載された「オタスの杜」関連記事において著者の主観的感情が表出された部分を抽出して分析した。そして、「排他」ベクトルを持つ言説が類似する理由の一端として、雑誌記事の特性があるのではないかと推察した。本章では、当時の文化人が樺太を旅して著した長文紀行の単行本を分析する。余裕のある紙幅に文才をもって描いた「オタスの杜」はいかなるものか。単行本であるから自由度も高かったはずである。

「オタスの杜」が存在した1926（昭和元）年前後から1945（昭和20）年までの20年ほどの間に、「オタスの杜」を含めて樺太を旅行して長文紀行の単行本を著した人物は、管見の範囲で11人である⁽³²⁾。それぞれの著作の言説について、前節と同様に分析する。ただし、修辞法あるいは婉曲表現などにより文学的色彩が濃いものもあり、著者の執筆背景や対象を捉える視点も著作ごとに異なる。そこで、各節冒頭で著者の略歴や立場を示すことで、当該記述がどのような心情から生じたのかを明らかにしたい。

なお、林芙美子と山川朱実については、写実的な筆致で外的状況を描写し、それらが投影した自己の内面を強く打ち出す内省的な作品である。オタスの住人達への評価ではないので本稿では割愛し「判定不能」とした。

6.1 北原白秋『フレップ・トリップ』アルス社、1928(昭和3)年2月

北原白秋(1885-1942)は詩・童謡・短歌などで活躍した。当著作の他に台湾訪問の紀行文『台湾紀行 華麗島風物誌』もある。樺太訪問は、1925（大正14）年8月に鉄道省主催による総勢300名の樺太観光団に加わったからで、横浜から小樽、国境安別、真岡、本斗、豊原、大泊、敷香、海豹島を2週間かけて巡った。なお、1914年29歳の頃には一時小笠原父島に居住したこともある。本文450ページのうちオタス該当部分である「敷香」の項は365-386の22ページで4.9%を占める。

「部落はたいした町家並にもなっていなかった。どの家も平家で、半ばはお粗末なバラック風であった。露領時代の名残も見えた。草もぼうぼう繁っていた。いちばん広い通りかと思われる砂地の十字路に出たところで、私は上の方から麦酒の空瓶らしいのを両手にかかえて小走りに駆けて来る八つか九つぐらいの卵色の軽い服を着けた亜麻色の髪の子に遭遇つ

(32) 青柳文吉編、菊池俊彦序『サハリン北方先住民族文献集文芸作品篇1905-45』北海道大学大学院文学研究科、2005年を参照。同著をもとに単行本でかつ本文で「オタスの杜」に言及のある文献を9件抽出した。さらに独自に見出した文献を2件追加して計11件とした(独自に見出した2件には*を付加)。阿部悦郎『樺太の旅：紀行対話』樺太日日新聞社代理部、1935年*；糸乘雷禪『樺太案内旅行日記』福田精舎、1927年；北原白秋『フレップ・トリップ』アルス、1928年；小生夢坊『僕の見た樺太』『僕の見た臺灣・樺太』日満新興文化協会、1935年*；杉村頭『新樺太風土記』若林書店、1936年；谷内尚文『樺太風物抄』七丈書院、1944年；浜田恒之助、大山長資『我が殖民地』富山房、1928年；林芙美子『樺太への旅』『私の紀行』新潮文庫、1939年；前田河廣一郎『国境からふと』六芸社、1939年；山川朱実『国境まで』大同印書館、1941年；若泉小太郎『樺太紀行 北緯五十度の旅』互光社、1931年。

た。と、その女の子が私のオロチヨンの鞆を見るとたちまち立ち停つて笑い出した、身体じゅうで、露草色のくるくるとした瞳であった。何か見たような顔だと思った。

「いいだろう、これ。」ぼんぼんと、こちらも叩いて見せた。それからふっと気がついて私は訊ねて見た。

「あ、君だったね、絵葉書に写っているのは。」

「やだア。知らないよ。」

「それは何なの。」

「石油。」

「君の名は。」

「セーニャ。」

そういつて、その瓶を目よりも高く差し上げると、また飛び跳ねる馴鹿の仔のように活潑に走り出した。素足の裏が白く白く翻った。」

著者が「部落」の少女セーニャと出会う印象的なシーンを抽出した。「敷香」の項はセーニャとの出会いから別れまでを叙述する。全編を通じて躍動的な文体で極めて陽性であり色彩豊かである。この時期の白秋は落ち着いた平和な生活を送っていたことも遠因だろう。「思無邪(おもいよこしまなし)」が白秋天与の資質とされ、本作でもその資質が十分に発揮される。無垢の童心を表現する主客未分化の文体実験を行ったとも言われる。少女との交流を中心に「親和性」ベクトル(セーニャを形容する7箇所)が大いに作用しており、「部落」のみすぼらしさを指摘する「排他性」ベクトル(2箇所)はかき消されている。

6.2 糸乗雷禅『樺太旅行日記』福田精舎、1927(昭和2)年11月

尺八の奏者でもあり源雲界と名乗った。自己を高く評価し、他人を辛く評価するという偏屈な人物であったという。それは本著作にも表れている。本著作は、樺太各地を旅しての紀行の体裁を取るが、樺太の法制、産業、時事問題なども織り込む。各所で詩を披露するのが特徴である。本文327ページのうちオタス記載部分は114-123の10ページで3.0%である。

「…此處の港にそそぐ幌内川は本島第一の大川を渡つて向ふ岸、左手の岸に、サンダー、トングース、オロッコ、等が住る中に桃太郎と言ふのが居る。是は仲々日本化して妾なぞ持つて威張つて居る。母親はオロッコ、父親は日本人で有る。

近頃是等の人種も、追々進化して来て、大層日本人を好み、亦日本人も、内地で生存競争に負けた落伍者が、是等と結婚し丸で河原乞食のような生活をして居る中には私立大學なぞ出た、高等教育を受けた者が是等と同棲なぞして居るのも有る世はさまざま。…」

この抜粋の文章全体を通じて他者への侮蔑に満ちている。ただ、それは民族に根差すそれではなく自己より劣位にある日本人にも向けられている。「排他性」ベクトル(生活を批判した3箇所)が強く作用していると言えるが、この場合の「排他」とは弱者一般に対するも

のである。これは個人のパーソナリティにも起因しているだろう。

6.3 濱田恒之助、大山長資『我が殖民地』富山房、1928(昭和3)年2月

前内閣拓殖局長浜田と同托嘱大山による共著で、満州、朝鮮、台湾、樺太を網羅する全873ページの大著である。樺太編の紀行文は大山の筆により145ページある。そのうち「オタスの杜」が登場するのは「ツンドラの産む悲哀」、「水藻を逐ふ彼等」の2章で807-817の11ページあり7.6%を占める。

「ツンドラの産む悲哀」

「…樺太庁では是等の土人を何とかして帝國臣民として同化させたいといふ心から指導扶掖に苦心を払つて居る、彼等の民度は非常に低く且つその生活慣習といふものがあるから之れに対して急激な変化を與ふことは大いに考へねばならないといふので、彼等の慣習は大いに之れを尊重し、農業なり漁業なり、彼等のために特種の保護制度を設けて、教育に衛生に、出来るだけ世話を焼いて居る、幸ひ彼等は従順に指導に従ふので大変やり易いが何分にも民族勢力の自然性とでもいふか、いくら保護を加へても彼等の人口は増加せず、年々減つて行く一方なので、種族保存といふ意味からも大いに苦心を払つて居るといふ事である。…」

「水藻を逐ふ彼等」

「(オロッコ族の天幕を訪ねて) …その天幕の中の婦人に御主人の名は何といふのかと尋ねたら、酋長の通訳で「カシキタ」の一家だといふことが解つた、茲に侍従はカシキタ君の一家を天幕の中から呼び出して記念撮影をし、その小さな赤ん坊に対して記念のために「やまと」といふ日本名をつけてやつた、その赤ん坊は未だ名が無く、小さな木船にくくりつけて抱いて居たのもいかにもオロッコらしい。正午近く此の天幕部落を御暇することにした。ツンドラの荒原に漂浪するカシキタ君の一家のために幸福を祈りつつ。…」

「ツンドラの産む悲哀」は、樺太庁の職員からの伝聞を記している部分で著者本人の主観的感情は表れないが、その職務の様子を「苦心を払つて居る」(2箇所)、「大いに考へねばならない」、「之れを尊重し」、「世話を焼いて居る」などと形容しており、それらは「土人」に対する「親和性」だと判断した。元高位の役人としての誠実さが示唆されているのではないか。「水藻を逐ふ彼等」は、一転して現地においてオロッコのカシキタ君一家を訪問する場面となる。彼らへの興味や親しみを率直に表現している。一家の赤ん坊に「やまと」という日本名を与え別れ際に彼らの幸福を祈るのは、人間として尊重していることの証左だろう。語句は最後の「幸福を祈りつつ」のみ挙げたが、全体として「親和性」ベクトルが強く働いている。

6.4 若泉小太郎『北緯五十度の旅：樺太紀行』互光社、1931年7月

著者については不詳である。全334ページあり、「オタスの杜」の記載のある「詩の幌内川」

の章は182-190の9ページあり2.7%を占める。

「…上陸すると酋長と云ふ四十歳前後の男が我等の長官に挨拶に来た。而して昔の領民が殿様に土地の産物を献上するやうに自分等の手で作つた木皮製の手箱や馴鹿の角などをささげた。純粹精神の如くである。長官も笑つて心よく受けた。

元来土人は多く此の幌内川の沿岸数十里の上流に至るまで一帯の地にテントを張つて馴鹿を追ひ、冬は山野に狩猟し、夏には河に漁どりして平和な生活を送つて居るのである。所謂水草を追ふ遊牧の民で、其の國境附近に居住して居るものは全く文化の恵みを受けず、今以て原始的生活を営んで居るのであるが、敷香附近に居る者は侵入者のために漸次其の生活に変化を来し、漸く文化に目覚めて来るよになつてきた。子供等は日本の教育を受け、文字を解し、巧に日本語を使ふ。而して大抵の者は日本名を以て居る。…」

「…又彼等は正直にして至つて友情に篤い。一碗の酒を與へても決して許しを受けなければ口をつけない。而して同僚相集つて共に茶碗を廻し合ふと云ふ。此点は邦人としても些か忸づるものがあらう。」

この文章全体を通じて、著者の「土人」への好意と共感の感情が満ちている。酋長と長官で交わされた挨拶と捧げ物の贈呈、平和な生活との形容、彼らの文化的変化を肯定的に捉えている点、彼らが友情に篤く礼儀正しい点を尊重している。極めて「親和性」ベクトル(6箇所)が強く作用していると言えよう。「排他性」の2箇所は、国境附近に居住する者についてであり、オタスの住人を指しているのではない。

6.5 阿部悦郎『樺太の旅：紀行対話』樺太日日新聞社代理部、1935(昭和10)年7月

著者は樺太にて樺太日日新聞社や樺太庁に勤務などした。一人旅であるものの紀行対話という実験的文体で叙述している。全262ページのうち「オタスの杜」という節は209-213の5ページで1.9%である。

『ここへ来る人々は、「オタスの杜」などと云ふものだから、詩のやうに美しいところだと思ひ多少憧れに似た気持でやつて来るらしいが、見らるる通りそんな所ではない。寧ろ却つて不潔をさへ感じる。

『さう云ふと、なんだか変な臭気がするやうだ。

『それが本當なんだよ。不潔な民族だ。入浴なんてことは殆どしない。顔を洗ふことがあつたとしても、まづガブガブ口をすすいで、その水を手に吐き出して顔になすりつける位のものだ。

『見たところ、服装などもアイヌあたりより気持がよさそうだがなァ。ところで、土人はみなこの村に集つてゐるのかい。』

『いや、ここに一番多く住んではゐるが、他にも、幌内川の上流地方、多来加湖畔、北知床半島等あちこちに点在してゐる。

『土人の教育所があるね。

『各種族の子供達を収容してゐるんだが、概して智能程度は低い。日本語や日本文字を教へてゐる。だから、土人達は逆も巧みに日本語を操るし、名前も、日本名前を持つてゐる一小舎のところへ行つたら見給へ。土人語の名前と日本名前と二つ並べた名札のぶらさがつてゐるのもあるから。教育所の子供らは智能は低いが技能的な方面は相當に發揮して、刺繍だとか彫刻などは却々巧いさうだ。

『我々外来者の姿を見ても、別段不思議がりもしないねじろじろと見るもんだが。

『馴れてゐるからさ。見物に来る日本人が騙すものだから、写真を撮らせると云つてもなかなか云ふことをきかない。幾らか金を呉れなどと云ふ。そして、シャッターをきらうとする間際になつて、急に身体を動かしたり舌を出したりする。始末に負へない。写真が出来たら送つてよこすなどと云ふけれど、本當に送つてくれる人がないさうだ。それでそんなことをするんだが。

『日本人も罪だね。・・・』

この架空の会話全体を通して、「土人」に対する侮蔑的な感情で満ちていると言えよう。「土人」の生活習慣についてはその不潔さを嫌悪し、「土人」の教育ではその智能の低さを指摘し、外来者との関係では日本人の非を認めつつも「土人」の応対を責めがちに述べている。総じて、「排他性」ベクトル(12箇所)が作用した文章であると言える。「親和性」ベクトルが作用する描写は、子供らの技能について述べた2箇所のみである。

6.6 小生夢坊『僕の見た台湾・樺太』日滿新興文化協会、1935(昭和10)年12月

小生夢坊(1895-1986)は石川県出身で富山の「中越日報」の編集長を務めた。後に東京下町で文化活動に従事する一方、各地を旅して紀行文をものした。紀行としての著書には、本著作以外にも『僕の見た満鮮』、『亜細亜の旅：満洲・朝鮮』、『亜細亜の旅：満蒙抄・朝鮮抄』などがある。樺太への旅行は1935(昭和10)年であった。本著作は合本で「僕の見た樺太」は後半全78ページである。そのうち「土人村」の節は147-149の3ページで3.8%を占める。

「・・・エキゾチックな土人部落を覗いてみる僕だった。オタスの杜とよばれている幌内川流域の小島だった。・・・

・・・敷香支庁では土人係が直接指揮監督しているが、土人には法律の適用が無い。漁業と狩猟も、土人保護の目的から専用漁場や放牧の地で自由にさせている。彼等の生業は狩猟と漁業である。自給自足の生活だが、以前は悪性の内地人が余裕有る彼等の収穫を搾取したものだ。土人の娘は混血児を生むものだった。

昭和五年九月、土人学校を設置、日本学童同様の尋常一年生からの教育を施してからといふもの土人の生活にも向上のきざしが現はれて来た。川村校長の犠牲的な教化力は驚嘆に値する。校長は土人と同じ着物で、ニコニコ笑つて居た。

僕は、ヤクーツ民族の王者ウイノクロフと名乗る巨人と会つた。

『日本の新聞雑誌は嘘つきだ』

と彼は云つた。僕を案内してくれたのが新聞記者だったから。彼は上海の同志から各国の新

聞を取り寄せていた。嘗ては白系ロシアの技師だった彼は、革命と同時にトナカイ三百頭をひきつれて逃げのびたのだった。そのトナカイも、今では一千頭にまで子を産むでくれたから、彼は土人中での資本家なのである。

僕は、彼の夢物語を梅宮氏の通訳で拝聴(?)した。仮想世界に対するユーモラスなお伽話としてみる、としても、あの小島に在って大アジア主義の完成を信念としている、覇気は樺太に出稼ぎ根性で乗り込んでいる者と対照して、その文化水準の高度なる点を認めてやっていいと思った。

しかも、観光客の大半は、これがろくでないのがおおいのだった。樺太に対する認識不足なのだ。悲しき運命にも尚未来の光を懸けて叫んで居る一土人よりも問題とならない輩なのだ。

どんな島にあっても、人間は常に光明をこそ見て生きるべきではないか？

オタスの杜の雑木林のうはしき。蒼穹の下に汚れなき原始生物を見るー」

元新聞記者であるからか事実の描写が多いが、全体を通じてオタスの住人達への理解と共感そして賞賛が見て取れる。「生活にも向上のきざし」、「汚れなき原始生物」を「親和性」バクトルが作用する字句と判断した。対照的に悪性の内地人、出稼ぎ根性で乗り込んでいる者、観光客の大半に対する批判は辛辣である。ウイノクロフについての記述も、他の多くの著者が批判的であるのに対し、「文化水準の高度なる」などと一定の理解を示している。最終行の美的な表現に全てが凝縮されている。総じて肯定的で、「親和性」が非常に高い。

6.7 杉村顕『新樺太風土記』若林書店、1936年12月

著者は長野県から樺太に移住し豊原高等女学校に勤務した。樺太の正しい姿を知って欲しいと敢えて通俗的、漫談的な筆致とした。樺太全域の地誌を扱い、「樺太の土人を語る」の章の「(二)オロッコ・ギリヤークの話」でオタスに触れる。全204ページで当該部分は7ページあり3.4%を占める。

「(オロッコ)オロッコは無智蒙昧で、それでめて狂暴性に富み、其の上怠け者で、酒や煙草は大好きと来る。全く好末(ママ)に終へない人間共だが、樺太庁が昭和7年に教育所を設置して、矯正に努力し出してからは、追々と此の悪風も影を潜めつつあるとか聞いた。…」

全体的に淡々と両民族の来歴と特徴を記しているが、引用部分はオロッコについて極めて否定的な形容をしており、「排他性」バクトル(4箇所)の度合いが高いと判定しうる。

6.8 前田河廣一郎『國境からふと』六芸社、1939(昭和14)年5月

前田河廣一郎(1888-1957)は宮城県出身で徳富蘆花に師事した。13年間の渡米を経て帰国後にプロレタリア作家としてデビューする。同書は全268ページありオタスを扱う「見世物」の章は134-137の4ページで1.5%を占める。樺太への旅行は1939(昭和14)年であり、

冒頭に「ぶらりと樺太へ遊びに行つた。」とあるから無目的な旅行のようだが、示唆に富む内容となっている。

「一部の樺太人は、オタスの杜の土人生活を、もつとも猟奇的なものとして、もっぱら内地人の興味をそそるための観光資料としてゐるが、私達から見ると、さういふ考へ方と、その考へ方を維持する人達の生活の方が、どんなに猟奇的であるかわからない。…

…ここに見のがせない一つの心理的罅隙(ギャップ)が、一部の樺太人の気持ちの中に発見される。それは、樺太にあつてもなほ、内地人の猟奇とするところを、自分達でも猟奇として考へてゐることである。別のことばで云へば、樺太の気候、風土、歴史の環境にあつては、オタスの杜の存在は、むしろ当前のことであつて、すこしも奇とするに足らないのである。…
…それを数学的に要約すれば、内地から移住した樺太人たちの一部には、生活は樺太に順応しながらも、趣味や嗜好や、好奇心などを通じての思考力の活動は、依然として内地から独立してゐないといふことになるのである。…

…一番よくものを解決するのは、ものそれ自身である。最近は、樺太開拓三十年來の土人教化の努力が酬ひられて、これら一と握りの異人種は、次第に日本人のレヴェルにまで進歩
発達して来てゐるそうである。ことに遊牧野民のかれらにも次第に貯蓄心が生じ、人的資源の缺乏から、かれらも内地人と同じ産業に参加して、労働するやうになりつつあるのである。オタスの杜が三十年間の『見世物小舎』を破壊して、オロッコ族、ギリヤーク族の解団式を挙げる日も遠くはあるまい。」

言及された指摘は示唆に富み、2つのベクトルにより文章の方向性を判定することは難しい。著者の視点がプロレタリア作家としての立ち位置にあるというのも一因だろう。「親和性」の描写を3箇所挙げた通り、筆者が「土人」に対して好意的な感情を持っていることは疑いないが、筆者はさらに論を進めて文明あるいは文明人への批判に転じている。

6.9 谷内尚文『樺太風物抄』七丈書院、1944(昭和19)年2月

著者は豊原高等女学校に勤務していた。本書は全233ページあり、「草原詩情」中の「オタスの杜(土人部落)」は183-191の9ページで3.9%を占める。

「大自然児オロッコは大自然に向ひ合つた生活のままで終止してゐる。狩猟の獲物も皆大自然の恵興だと信じてゐるのであつて、自然に順応して自然を犯さないことが彼らの生活への安心であると云へよう。オロッコは白樺林の王者と云はれてゐる。それほど彼らは白樺を巧みに生活の中にとり入れてゐる。住居はこの美しい白樺の皮で円錐形に葺き、その中で豊かな獣皮や樹皮などですばらしい衣服や袋物を製作してゐる。枕から水汲みや食器に至るまで白樺或はその樹皮を使用してゐるが樹皮で作つた水汲みなどは決して水の洩ることがない。殺人的な厳寒と同居する彼らの生活—そこには小さな文明の経験や理論は粉雪にも似て飛散してしまふであろう。人の気配も無い草原のつらなり、ツンドラの魅惑と壓力、その蒼茫たる大自然の中で、すらりと世の文明から身を引いて素朴な生活をつづけてゐるのだ。」

「先年私は…オロッコの小屋で泊つたことがあつたが、私達の彼らの嗜好物をよく知つていたので焼酎と神薬を持つて行つてやつたが、とても喜ばれたものである。彼らは我々に澤山のフレップの實や野苺の實を御馳走して呉れた。…小屋では異様な臭気と物凄い蚊群に悩まされたが、彼らは何れも親切で、落ち着いた印象を人に與へるものがあつた。彼らは無闇に丁重にしたり、腹の底では気に入らないのに顔では笑つて見せる、そんな儀礼的なものをもたない。眞實味があり、自分の思ふ通りに振舞つて気が向かなければ一日口を利かない。彼らの天性の裡には、論争や、思ひあがりや、嫌悪は巢喰ふ場所が無いらしい。いやそればかりではない。世の侮蔑や反抗や怨恨などは彼らの微笑に遇ふと皆んな緩和してしまふやうである。彼らの生活が最初に私達を打つたものは、率直さである。その率直さが総べてのものに澁刺と生氣を與へてゐる。単純簡素な彼らの世界はその率直から必然的に生れたものに外ならない。」

この文章では、前段でオロッコの自然との関わり方、後段でオロッコとの交流を通して知り得た彼らの態度について記している。自然と共生し自然からの恵みを巧みに利用した野性的で素朴な生活を描写した前段では、「親和性」ベクトルの字句のみ5個抽出した。オロッコの小屋を訪ねて彼等の率直さが対立的感情を取め微笑が否定的感情を緩和すると述べる後段では、「親和性」ベクトルの部分を8箇所、「排他性」ベクトルは小屋を形容する部分で2箇所抽出した。全体を通してオロッコに極めて好意的で「親和性」ベクトルが強く作用している。すでに戦局は思わしくなく敗戦が濃厚な時期ではあつたが、のんびりした樺太の風情が描かれている。

6.10 小括

これら9作品の抜粋では、様々な背景や立場を持つ著者それぞれの個性が発揮され、作品ごとに独特の筆致や言葉遣いが見られるとともに、オタスの住人に対するまなざしも多様である。全体を通して、5編を「親和性」ベクトルが強い作品、3編を「排他性」ベクトルが強い作品であると判定した。残り3作品については、本稿では割愛した林と山川のそれは内省的な表現であるため、前田河のそれは論点が文明批評に転じているため、それぞれ判定不能とした。ただし、これら3作品も対象を否定的に捉えているわけではない。

これら作品群は観光案内ではないため、ことさらに非日常性を強調する必要はない。読み物としてただ旅の道程を淡々と記せば良い。しかし、その豊かな筆致と独特の文体がそれぞれに独自性と魅力を生み出している。

それぞれが単著である作品群を、数値を用いて横断的に論じることは適切ではないかもしれないが、ここでは便宜的に前章と同様に分析する。11作品のうち「親和性」45%、「排他性」27%、「判別不能」27%（林と山川の作品含む）という結果が得られた。さらに9作品に現れるベクトルを総合すると、「親和性」ベクトルが作用する語句が合計40箇所(62%)、「排他性」ベクトルが作用する語句が合計25箇所(38%)となった。一作品を単位としても、

個々の作品中に現れる語句を総合しても、「親和性」が「排他性」を上回っていることが判明した。

7. 結論

7.1 <観光者>、<調査者>、<当事者>の交錯するまなざし

本論では、5節で雑誌『旅』の記事、6節で個人の長文紀行の単行本を題材に、<観光者>が観光行為としての「オタスの杜」訪問の言説を検討した。「親和性」ベクトルと「排他性」ベクトルを設定したところ、『旅』誌掲載の全記事から抽出した語句を合計して「親和性」24%、「排他性」76%、個人の全11作品を総合的に判定して「親和性」5作品(45%)、「排他性」3作品(27%)、判別不能3作品(27%)、さらに個々の作品に現れる語句のベクトルを合計すると、「親和性」47箇所(64%)、「排他性」27箇所(36%)という結果が得られた。

雑誌では「排他性」が高く、個人の紀行では「親和性」が高い。雑誌は、観光をテーマとして非日常を描くためにことさら他者性や異質性を強調するため、あるいは短文記事のためにステレオタイプの表現となり既出の文言を流用したため、などの理由が考えられる。他方、単行本は、紙幅を気にせず自由に記述できたため、著者らの知識教養が高くそれが内容に投影したため、などの理由が考えられる。

記録を残した<観光者>の抱くこうした主観的感情のベクトルは、外面に表出した際には観光対象に向けられたまなざしとなる。それは端的に言えば、「文明」と「原始」を対比させて、自己と異なる他者としての「土人」を追い求めるまなざしである。ある者は親和的なまなざしで、またある者は排他的なまなざしで「土人」を眺めた。一部の者は「土人」を侮蔑する者を批判し、それによって「文明」批判に転じるというまなざしを得た。

紀行文などの記録を残すことのなかった平凡な観光者においても、自己と異なる他者としての原始の「土人」を求めるというまなざしに変わりはない。『樺太日日新聞』の記事から、「オタスの杜」に最盛期には年間7000人もの観光客が来訪し、公園化もしくは遊園地化が目指され、売店の設置や渡し船の新造などが行われたことがわかる。「オタスの杜」は、「土人の都」と喧伝された一方、<観光する側>から見れば一種のテーマパークであり「土人」は見世物にほかならなかつた。つまり、<観光する側>は訪問地のありのままの姿、例えば北方少数先住民の営む生活や生業あるいは文化などについて、その<真正性>を求めてはおらず、過度に「原始」が誇張された「土人」の姿を<偽物=疑似イベント>⁽³³⁾であることを知りつつ享受していたはずである。

(33) ダニエル・J. ブーアスティン著、星野郁美、後藤和彦訳『幻影の時代：マスコミが製造する事実』東京創元社、1964年、15-53頁。<疑似イベント>はブーアスティンの造語でメディアに描かれたイメージの方が実際の出来事よりも現実感をもつという現象のこと。前行の<真正性>もブーアスティンによって多用された用語で疑似イベントを体験することでは真正性は得られないと論じた。

序論で、人の〈移動〉を通じてナショナルな共同性が想像されるメカニズムにおいて、ある共通の地平の下で差異を〈比較〉する視点が重要性を持つてくると述べた。樺太の先住民観光での〈比較〉とは、日本の統治下となった土地で観光者が自らと他者としての「土人」との差異を比べること、換言すればいかなるまなざしを向けるかということである。

一方、こうした〈観光者〉に先立つ訪問者として〈調査者〉たる人類学者がいる。帝国日本膨張の時代の人類学的調査は、背後に軍部の支援のあった領有直後の「探検」的調査に始まり、旧慣調査や民間人による調査を経て、官庁の主導による「科学的調査へと遷移してきた。前掲の中生の述べるように、調査では「異化」と「同化」の相反するベクトルが拮抗したが、統治の確立により「同化」圧力が強まってくる。樺太においては、例えば官製調査の報告書として前掲の『オロッコ土人調査其他』⁽³⁴⁾があり、その抜粋からいかなる視点で「土人」を捉えていたかが如実にわかる。

「(土人保護の実際)

優等種族のために圧迫せられ極北寒地に余命を保ち年と共に滅びゆく弱小民族、仮令国籍を有しなくとも放棄しておくべきではないので土人事務所を設け、専務の指導員を置いて保護管理の方法を講じている。…

(敷香教育所事情：沿革)

土人の生活は太古未開時代に於ける狩猟の状態で、魚族鳥獸を逐ふて転々其の居を移し、自然により自然に服し自らの生産する途を知らないのであるから、斯かる動物的生活から脱して人間的に生活せしめんとするには元より教育に俟たなければならない。…⁽³⁵⁾」

こうした官製調査の主眼は、いかに「滅びゆく弱小民族」である「土人」を保護や教育によって「動物的生活から脱して人間的に生活」できるよう導くか、つまりいかに臣民へと教化するかという点にあった。

一方、〈調査される側〉であり〈観光される側〉でもあった当の少数先住民の状況は、官庁による保護・教育のまなざしと観光客からの物見遊山のまなざし(「親和性」ベクトルであれ「排他性」ベクトルであれ)の双方に晒され、言わば〈日本化〉を要請する声と〈未開〉のままであってほしいという願望の間を揺れ動くダブルバインドの状況に立たされていた。観光人類学の先達ヴァレン・L・スミスは、観光を〈ホスト〉と〈ゲスト〉の相互作用として複眼的に捉えた⁽³⁶⁾。「オタスの杜」の事例において、〈ゲスト〉側に立つのはまなざしを異にする外来の〈調査者(ないしは統治者)〉と〈観光者〉である。〈ホスト〉側に立つオタスの住人達は、本来ならばホスト役を担いうる先住者、言い換えれば「在地主体」

(34) 樺太庁敷香支庁編『オロッコ土人調査其他』敷香支庁、1932年。

(35) 同上、30-31頁。

(36) ヴァレン・L・スミス編、市野澤潤平、東賢太郎、橋本和也監訳『ホスト・アンド・ゲスト：観光人類学とはなにか』ミネルヴァ書房、2018年、1-21頁。

であるべきはずだ。だが、当時はそれが許される時代状況ではなかった。ここでは、古来その土地に生きて生業に携わってきた人間、コト(事)に当たってきた人間という意味において<当事者>という呼称を使用することとしたい。

<調査者>は当初は「異化」、後には「同化」ベクトル線上のまなざしから眺めた。<観光者>の一半は<当事者>への共感から「親和性」ベクトルを抱き、もう一半は<当事者>への侮蔑から「排他性」ベクトルを抱き、両ベクトルの線上から対象を眺めた。一部の者は「土人」を侮蔑する者を批判し、それによって自らの属する「文明」批判に転じるというまなざしを得た。<当事者>であるオタスの住人達は受動的な立場で来訪者を受け入れながら日々の暮らしに眼を向ける。「オタスの杜」は、外来の<調査者>、<観光者>、そして在地の<当事者>という三者のまなざしが交錯する重層的な磁場であった。その交錯するまなざしは<比較>を要請し、ナショナルな共同性が立ち現れる一つの契機となったことだろう。

7.2 今後の課題

今後の課題として以下の三点を考えている。

第一は、本稿では<観光者>のまなざしについて主に述べたが、結論で導入した<調査者>や<当事者>といった視座との相関関係を考察することにある。<調査者>について樺太においては、帝政ロシアの南下への対処から江戸時代中期より幕府主導の「探検」的調査が行われてきた歴史があり、次いで、1905（明治38）年の領有当初から大正年間まで、坪井正五郎の命を受けた石田収蔵や中目覚、鳥居龍蔵らによる初期の「科学」的調査が行われ、その後昭和に入って様々な民間人による調査とともに樺太庁や樺太庁敷香支庁による「官製」調査が行われた。観光の成立に先立つ調査の歴史を踏まえた上で、<調査者>と<観光者>の相違を検討する。さらに、両者はともに対象との間に観察や交流を通して影響を与え合うものであり、対象となった<当事者>たる樺太先住民も含め、文化変容などの相互影響がどう生じたのか検討したい。時系列に沿った一連の出来事の生起についての共有体験を持ちながら、三者はそれぞれ語り方や記し方が異なるだろうから、ナラティブアプローチも有効な手段であると考えられる。三者のまなざしの交錯について具体的に描きたいと思う。

第二は、台湾との比較を通して樺太における近代ツーリズムの成立の諸相を浮き彫りにすることである。樺太を台湾の「鏡」あるいは「ミニチュア」と想像することは容易い。樺太に10年先んじて編入された台湾は、樺太と同じく少数先住民が居住する地域である。彼らを対象とした人類学的調査、それに続く観光現象が見られたこともパラレルに進行した。だが、先住民観光という事象に限って見ても、台湾の少数先住民は人口規模が大きく抵抗運動も激しかったが、樺太はアイヌ以外の少数先住民の人口が日本統治時代を通じてほぼ

500人前後しかなく、両者を単純に比較することは困難である。『台湾鉄道旅行案内』の「観光・視察対象」の地域別集計を行った曾山毅によると、中央山地の地名は1924（大正13）年版から急激に増加していく。そして、台湾遊覧券制度で指定された遊覧地には、先住民が観光対象とされた場所として、サンティモン社、ボンガリ社、紅頭嶼があり、烏来社、角板山、日月潭、阿里山などにも先住民観光の要素があった。それら「蕃社」では、漢人にほぼ同化したとされる「化蕃」が杵歌や独木舟などを披露したという⁽³⁷⁾。このように少なからぬ場所において先住民が観光の対象とされてきた。これら諸事象は樺太についても何らかの示唆を与えてくれるだろう。

第三は、ナショナルイベントについて検討することである。前述の通り阿部は統治技術の一つとして「博覧会」を捉えた。樺太においては1939（昭和14）年に樺太庁中央試験所による「東亜北方開発展覧会」が開催された。「東亜北方」とは、「東経100度（バイカル湖）以東、北緯40度（長城）以北に、東経100度以西のモンゴル人民共和国を加えて、本州、朝鮮、北海道を除いたアジア地域を指す」⁽³⁸⁾と、その極めて広い地域区分が新しいコンセプトとして打ち出されたが、台湾においてはそれに先じる1935（昭和10）年に始政40周年を記念して台湾総督府による「台湾博覧会」が開催されている。また、1925（大正14）年の当時の皇太子の樺太行啓⁽³⁹⁾についても、それに先立つ1923（大正12）年に同じく皇太子の台湾行啓⁽⁴⁰⁾があった。このパラレルに執り行われた両ナショナルイベントは同列に論じなければならないだろう。

さらに、その先には帝国日本の他の外地における少数先住民の調査と観光の事例を検証するという課題がある。島嶼帝国から半島、大陸へと膨張の度を強めた日本は、どのように帝国の輪郭を浮き彫りにしていったのか。各地の事例の比較検討を通じて見極めたい。

結びにかえて

自明的な外来の〈調査者〉、〈観光者〉はひとまず置くとして、最も重要なのは調査され、観光される側の存在、すなわち在地の〈当事者〉であるオタスの住人達の立場であろう。彼らの声に耳を傾ける必要があるが、それはあまりにも少ない。ここでは、その一つとしてウイлтаの北川アイ子の言葉を紹介する。ただし、これは戦後日本に“引き揚げ”

(37) 曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2003年、240-260頁。

(38) 中山大将『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成：周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』京都大学学術出版会、2014年、208頁。

(39) 樺太への皇太子行啓については、池田裕子「一九二五年の樺太における『国民統合』」原ほか編著『日本帝国の膨張と縮小』、363-387頁。

(40) 台湾への皇太子行啓の記録『台湾行啓記録』の存在および台南市政府観光旅遊局が「裕仁皇太子台湾周遊ルート」を作成して観光パンフレットとして配布していることを、日本国際文化学会会員藤田賀久氏の教示で知った。

てかなり経ってからの述懐である。

北川アイ子(口述)「…オタスに来た観光客の中には「日本人と同じ顔をして着る物も一緒。土人って聞いていたから、ハダカで生活していると思った。こんな優れた彫刻や刺繍をするのに、いかにも劣った人間のように土人という。なぜそう呼ばなければならないのか。」といて疑問を持った人もいて、そんな人は必ずがんばってくださいねと言って励ましてくれた。…」(『第一二回特別展 樺太一九〇五-四五-日本領時代の少数民族-』⁽⁴¹⁾)

この述懐から感じられるのは、当時少女であったアイ子が、善意の「日本人」からの励ましを一心に受ける受動的な立場である。ところが、そのウイльтаの一家は日本の敗戦を挟んで苦難の道を歩み、後に大きな飛躍を遂げた。アイ子の兄ダーヒンニエニ・ゲンダーヌは、戦時中に「召集令状」を受けて特務機関員として日ソ国境での諜報活動に従事させられ、戦後は「戦犯」としてシベリアに10年間抑留された。“帰還”後網走に定住したゲンダーヌは、軍人恩給の受給申請をするも却下されてしまう。特務機関長には召集権はなかったからというのが政府見解であった。それを機に、ゲンダーヌは民族の権利のために闘う決意をする。それと同時に、民族資料館ジャッカ・ドフニの建設や合同慰霊碑キリシエの建立をアイ子らと進め、訪問者へウイльта文化の普及活動などを行った⁽⁴²⁾。網走における彼らの立場は、真の意味での<ホスト>であるところの「在地主体」に飛躍したと言えるのではなかろうか。最後にゲンダーヌが合同慰霊碑キリシエに刻んだ字句を紹介してこの小論を締めくくりたい。

「1942年突如召集礼状をうけ サハリンの旧国境で そして
戦後戦犯者の汚名をきせられ シベリアで非業の死を
とげたウイльта ニブヒの若者たち その数30名にのぼる
日本政府がいかに責任をのがれようとも この碑は
いつまでも歴史の事実を語りつぐことだろう
ウリンガジ アッパ タアリシュ (静かに眠れ)」

追記)本稿には差別的な用語や不適切な表現が含まれるが、当時の時代状況を反映してそのままにしている。

(41) 北海道立北方民族博物館編『第一二回特別展 樺太一九〇五-四五-日本領時代の少数民族』北海道立北方民族博物館、1997年、15-18頁。

(42) ダーヒンニエニ・ゲンダーヌの来歴については、田中、ゲンダーヌ『ゲンダーヌ』を参照。